

第13回 銀華文学賞発表

銀華文学賞

再開二回目の銀華文学賞は、日本全国から一九六篇の御応募をいただきました。今年は多彩な作品が寄せられ、活気に満ちた予備選考となりました。心から御礼申し上げます。

予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八寛正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

誌面の都合により、奨励賞などの作品は次号以降に順次掲載させていただきます。

第十三回銀華文学賞授賞式・祝賀会は、申し訳ございませんが、コロナウィルスの関係から見送らせていただきます。賞状・賞品などは後日直接御本人宛てに送らせていただきます。御了承ください。

なお銀華文学賞は明年も年齢を四十歳以上に繰り下げさせていただき、枚数、締切、審査料などすべて同じに募集させていただきます。どうぞまた奮って御応募ください。心からお待ちしております。

最優秀賞

「出所証明」

原 浩 一 郎

(滋賀県大津市)



優秀賞

「トランクルーム」

室 町 眞

(東京都杉並区)

「ラストオーダー」

塩崎憲治

(山形県米沢市)

「マスク」

眞住居明代

(大阪府東大阪市)

奨励賞

「稲作拾遺譚」

嶋津治夫

(千葉県香取市)

「雨があがる前」

吉岡幸一

(福岡県福岡市)

「家族の肖像」

折口 眞

(埼玉県所沢市)

「バデイスの記憶」

木村雅樹

(埼玉県三郷市)

「棄民の浜」

久保信之

(神奈川県横須賀市)

「熱帯林」

篠崎フクシ

(東京都小平市)



銀華文学賞優秀賞メダル

佳作

- 「碁盤」 加崎希和
「鈍色の鉄路」 梶川洋一郎
「星と七夕」 山田 明
「強制養子縁組」 西本美彦
「マリリー・アントワネットのお茶会」 菊野 啓
「水辺のメモリー」 土田ひろし
「曠日」 塩崎勝彦
「三社祭」 大森康宏
「託された日記」 松本昂幸
「夏衣更紗」 桃乃木權士
「Eと老人」 林 晋作
「牡丹雪」 前岡光明
「幽霊」 本田敬幸
「その灯の盾」 宮内 元
「蒼い残滓」 勢 隆二

「幾千世」

悠希マイコ

「蛇を飼う」

高倉麻耶

「みかん色の夢」

佐藤 勉

「よじわの茂蔵」

西山慶尚

「神棚毀し」

平安名尚

「行き合いの空」

秋 檀

「月夜」

神山修治

「トウーランドット 誰も寝てはならぬ」

内田聖子

歴史小説賞佳作

「室津の遊女友君」

宮本義則

「岸和田合戦顛末記」

中野雅丈

「見たい夢」

南 理維

「坂の上のインディアン」

吉田満春

選評

これしかない

八寛正大



今年は、とにかくコロナウイルスの世界的猛威に席巻され、外出の自粛要請も受け、夏の一段と厳しい猛暑酷暑の攻勢に晒され、晩秋また第三次のコロナ感染に襲われている。

でも人間の本質は動くこと、身体のが規制されても脳が活性化すればよく、その思考の最高の道具は〈言葉〉であり、それに曲がりなりにも携わる我々は、ある意味それを駆使し深め得るチャンスかもしれない。何嘆くことなく多少拘束を余儀なくされた空間で、言葉の飛翔を楽しむ……。最近は〈事実を把握し、でも気分を身を委ねず、価値判断を擦り抜けて、行為を楽しむ〉ということをもっとに日々生活している。折角なのでもうひとつ、〈臆せず、

河林満賞の移設について

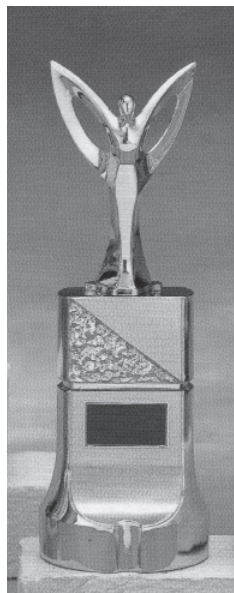
河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は二〇一五年より、銀華文学賞からまほろば賞の中に移され、同人雑誌掲載の小説作品を対象にし、まほろば賞選考会において同時に選考され、決定されることとなりました。

受賞者には賞状、賞品、賞金五万円がまほろば賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



躊躇わず、拘らず、留まらず、高齡青年と自称しつつ新しいものを見出し関わっている。

最優秀賞「出所証明」

まず、読んだ時、当選作はこれしかないと思われた。見事な描写と克明で分かりやすい文章。場面の転換の妙、ラストへ向かって組み立てられ流れていくストーリー、どれをとってもほとんど完璧である。善悪のどちらかへ転びそうな紙一重のところで、この出所した男のこの世への二度目の出生がなされ得たのだと思えた瞬間、感動の涙を禁じえなかった。それぞれに大なり小なり個性の強い選者四人が異口同音に当選作に推したのもであり、銀華文学賞の今までの受賞作品の中でも、これほど直截に感銘を与えたものは初めてだと告白しておきたい。

一応ストーリーを描けば、人を泣かせたり甚振^{いたぶ}ったりした過去のある男が、出所する。目の前で見せしめにされた殺人に怖くなり、今度はまともな人間として世の中に出直そうとしたのだ。しかし、肝心の出所証明がなくなっている！それは一緒に出所した仲間のちよつとした悪戯・いやがらせで、ある団地の回覧板に張り付けられていたのだ。

これでは保険証も取れず就職もできないと、再度交付してもらうため元の刑務所に電話するが、冷たく断られる。困って頼った羽振りの良いつての務所仲間には、善人ぶるな——と一括され、再び悪への誘いを受ける。万事休し

て途方に暮れ、花火の音のする雨の中を歩いていく……そして他者への己の罪深さと己自身の成育歴の悲惨さを回想し、堪えられなくなってくる……その時、あまりのびしょ濡れの姿を見た若い子連れの夫婦が傘を差し出してくれる。その後、元刑務所の刑務官が主人公を見つけ、出所証明が見つかったことを告げる。絶望の縁にいた主人公は、雨の中嗚咽しながら、道を歩いて行く……。

生れつきの悪人も善人もいない、ただ様々な状況の中、偶然も含め些細な関り・できごとによって、どちらかへ追いやられていくのだ。人間はこの世に母親から産み出される。しかし身体はそうであっても、心は自らの経験や意思を積み重ねて生み出すものだ。この男の本当の出所証明とは形としての紙ではなかった。己の悲惨で悍ましい過去という産道を再び抜け直し、他者からの善意の偶然を甘受し得て嗚咽する、それこそ、この男の〈心の産声〉だったのだ。

男は本物の『出所証明』を得られたのだ。ディケンズの『クリスマス・キャロル』を思い出した。松本清張も……端的に言えば〈悔い改め〉のテーマといえよう。でも、評を書きながらまた感動の涙が出てくる！黒澤明がいたら、見事に映像化してくるだろう……。

優秀賞「ラストオーダー」

転移性膀胱がんを宣告された主人公の過去の回想（世界に最高品質の医療機器を届けたいという思いの一方、己に

つらく当たった上司との葛藤とその死……）と、また趣味の釣りでの憧れの大岩魚への思い、家族（折り合えなかった息子）のことが描かれる。

〈栄光の階段を踏み外した者、心を病み生きた屍となった者、喰い込むロープの軋みを耳元で聴いた者、自分にして、重篤な肺炎を隠し通した多忙な日。人間ハードルの障害物レースで、奇跡的にゴールにたどり着いたのは自分一人だった〉という描写に象徴される会社人間としての激務。それは〈トップの補佐役という名の奴隷となった進（主人公）は、全てのプライドを捨て、あらゆる屈辱に堪えながら、上司となった黒沼に仕えた〉と具体的にある。

息子に対しては〈荒れ出した息子の部屋……髪の毛が、痛々しく重なり合っている。……息子は大学を中退し、居場所を求めた放浪の果てに、今はマニラのスラム街で、それなりの所帯を持っている〉という家族への悔い。

そして裏で支えてくれた妻への思いから、梓川への旅に出、そのホテルのマスターの釣りへの言葉とその地の雰囲気、これからの闘病への勇気をもらったように結末を迎える。

仕事の話、川の主の大岩魚との格闘、それぞれにかなり思いが込められ、インパクトは感じられる。しかし、話が詰め込まれ過ぎた感があり、それぞれの連携構成のバランスが取れていない気がした。会社時代の話、息子の話は、

それだけで書き切られたものを一度読みたいとも。

優秀賞「マスク」

コロナウイルス防御のマスクづくりの話。頼まれたマスク制作のために、粉骨砕身働く主人公。かつては売れないハンドメイド作家の六十代後半。

〈私の欲しいのは金ではなく生き甲斐なのだ〉。その中で、この主人公の自覚が進んで行く。〈私は自分でも愚鈍な性格という自覚があつて、それでずっと劣等感を感じてきたのだが、そのマイナスの自覚が今度ばかりは役に立った。マスクを作るために毎日何時間もミシンを踏み続け、同じ工程を何百回も繰り返す。それは愚鈍だから出来ることであつた〉。ところがそれに必要なゴム紐が無くなってしまい、それを探さず中絶りつかれたようになる。そのラストの描写が良い。

〈不意に酸っぱいものが喉元にせり上がってきた。……手洗いで口をすすいで顔をあげる。その時鏡の中にひとりの女が映り込んでいるのに気付いた。知らない女だ。艶のないばさばさした髪……生気のないその顔の瞳の部分だけが異様な光を放っている……瞳の中の異様な光に鋭く心を射抜かれて、私は鏡の前に呆然と立ち尽くしていた〉と。

優秀賞「トランクルーム」

自分の家ではない自由な空間を求めて、「賃貸式トランクルーム」を借りることになった話。それを借りたばかり

の感覚は新鮮だ。(鍵を差し込んでドアを開け、室内に入って電気のスイッチを入れた。心臓がドクンと脈を打つ。かつて大学生だったころ、交際相手の女の部屋を初めて訪ねた時と同じ興奮が瞬時に蘇った)と。コンセプトは(ここを自室とし、秘密の隠れ家代わりに使用して、だれにも邪魔をされない自由な時間を過ごす)というもの。その後、主人公のやりたかった行為を展開したり、他の部屋の事が描かれる。SM愛好家や仏壇を入れる男まで出てくる。最後は妻に見つかって押しかけられ……発想は面白かったが、展開にどこか無理があるように感じられた。

奨励賞「稲作拾遺譚」

稲作の研究に人生を賭けた主人公、ジャンボタニシをはじめとして、様々な稲の害虫が出てくる。イネドロオイムシとの格闘はなかなかよく伝わってくる。まだ随所に宮沢賢治も引用されている。小説というより、ある種、情を込めた記録作品という感じだが、時々出逢う耕作者H氏という人物をさらに造型させて行ったら面白いかと思われた。

奨励賞「雨が上がる前」

セレクトショップ「サン」を一人で経営する女性の話。夫とやる予定だったのだが、先立たれてしまっている。道を挟んだ洋食屋さん、白いワンピースを着て見せた若い女性客、入院している母親がマグカップを欲しいというので買いにきた少年、洋食屋の火事とその始末……それらを通

して、ほのぼのとした人情の感覚が伝わってくる。まだ若いから実家に戻って、と言って来る母親もいるが、本人は店を続けていく覚悟をもつ。善人だけの作られた空間だが、ホームドラマを見ているようで心地よかった。

奨励賞「家族の肖像」

息子を持つ母親と、娘二人をもつ父親、その二人が再婚する苦労話。ある種の複合家族。それを妻の側からの視点で描いている。特に話の山が大きくあるわけではないが、懐いてくれない相手の二人の娘など良く描かれ、でも生理に立ち合ってあげることを通して、だんだん打ち解けていく。そして夫婦の間にも新しい子どもが誕生する。

だいぶ前に、フランス在住のルポライターがフランスの家族事情について、このような連れ子を持った親同士の結婚による「複合家族」というものを書いていたことを思い出した。その一ケースとして日本でも書かれても良いとは思った。

奨励賞「バデイスの記憶」

主人公はある居酒屋で小田という人物に逢う。小田はいつも悟りきった顔をし、人の言葉をはぐらかすようなところがあった。趣味も特技もない男で、不祥事で会社を辞めていたが就職が決まる。主人公はそれを喜んであげようとした矢先、小田は事故で死ぬ。その後、男に捨てられ身ごもったまま自死しようとして、小田に救われた女性が出て

くる。小田は事故だったのか、自死だったのか。そこへの主人公の洞察が欲しかった気はする。それらを経て、己の家庭へ目を向け直す主人公。

小田という名前の連呼が多すぎる反面、その人物のイメージは今一つ伝わってこなかった。

奨励賞「熱帯雨林」

会社勤務の過酷さを描いている。亀のフーコーや同僚のマタヨシは描けてはいるが、もう少し踏み込みつつ、熱帯雨林を俯瞰して見せて欲しい気もした。

奨励賞「棄民の浜」

コロナウイルスも取り上げ、疫病への思いをなかなか幻想的に描いてはいるが、そこ(恐怖)へ踏み込まなくても、差別を考える教育の仕方はある気がした。

以下は佳作について。

「見たい夢」前回は秀吉の目から描いた時代物を書いていた作者。文章力抜群で、それは完成されていると思う。

今回は、秀吉と柴田勝家との戦いの、柴田側の一兵卒の視点から描かれている。間に兵卒を装った二人の間者の生き方を交え、主人公は手柄を上げて帰り、結婚したい娘もある設定。

大状況を俯瞰しつつ、なかなか見事に作品を作り上げている。最後は結局、命からがら帰ってくると、娘は弟と祝言を上げることになり、残ったのは「命」だけという、惨

めな気づきで終わる。人間の欲と現実を的確にとらえた快作と評者は感じた。

「曠日」結婚を考えていた「あの人」と、公園で良く出会うその父親の「老人」と、縁の下に住み着いてしまった「むく犬」、それだけの登場人物という設定。あわい関係が淡々と描かれ、互いに何を侵すこともなく、日常はゆっくりこともなげに動いていく。しかし、その淡い関係の中に命の真実が捉えられていると感じた。しかもそのトーンは最後まで落ちなかった。

連想だが、カフカの『掟の門』やブツツァーティの『タール人の沙漠』など思い出した。このような作品も文学として、私は大切なスタンスのジャンルだと思っている。読み応えを感じた力作と評価したい。

「よじわの茂蔵」酒がめつばう好きだが、ほとんど何の役にも立たない、村のデクノボー茂蔵と、ある意味彼の面倒を見つけてやった定道の話。焼酎の盗み飲みくらいがドラマだ。そして茂蔵はあっけなく死ぬ。淡々と描かれているように見える。

しかし、茂蔵には特攻隊で死んだ義行という、茂蔵と同じ年の息子がいた。隣同士の二人はいつも一緒に遊んだ仲だった。茂蔵は死ぬ間際にその義行のことを見たと言う。

「馬鹿言うな、義行はもうとうの昔に戦死しちよる。死んだ者が会いにくるわけなからうが」「いや、あれは間違

いなく義行君じゃった。ちゃんと飛行服を着ちよったけん」茂蔵は核心に満ちた口調で言った。おそらく、息子と共に生きた過去を持つこの茂蔵の記憶こそ、唯一最高の定道への恩返しだったのだ。さり気なく、しかし深く静かに人間の縁をつづった秀作であると思う。

「水辺のメモリー」 子どもを連れて妻が実家に帰った時の事、居酒屋に入り飲んでいると、故郷の少年時代の女友だちに再会する。故郷の少年時代には川辺でよく遊んでいたことを思い出す。ちょうど思春期、その砂地で気持ちの良い自慰行為をしていたことがあり、それを彼女に見られた過去があった。そんなことを思い出しつつ、ちょっと気持ちは不倫へ行きかけるが家庭に戻るという話。盛上がりはないが、水辺の描写は、実に瑞々しく読めた。

「三社祭」 連れ合いを失くし思い屈していたが、同級会の幹事役を引き受けてからは、元気を回復した主人公。その会と、往きかえりの中で酔っているいろいろな回想したことが語られている。とくに浅草、三社祭の描写はなかなか。ちょっと分かりにくさはあったが、作者の筆力はかなりと今回も敬服する。

「Eと老人」 Eとは何？ と読み進みウナギの英語の頭文字と分かる。末期の癌を病む主人公、病室の窓から川を眺めつつ、いろいろな回想したことが語られる。初めの三、四ページのウナギが長い旅を経て戻ってくるという描写は

なかなかだった。

「月夜」 家へ帰る時、若い見知らぬ女性が、己の家の辺りに消える。主人公の青年は、おかしいな？ と思う。それは実は祖母で、祖母もまた己の亡き夫を主人公（孫）に見ていたという、ちょっと気の利いた小品、面白かった。

「幾千世」 文盲の母親と伝染病に罹り瀕死の妹、それに付きそう少年の兄。貧しい悲しさがよく描けてはいるが、この少年「孝市」のこれからこそ読みたいと思われた。

「蒼い残滓」 工場内の青春時代、仕事と共に野球チームに打ち込んでいた主人公が、憎い上司にボールをぶつけた話。面白さは感じられた。

「牡丹雪」 貧乏画家の父と、デザイナーの娘の視点からの関り。良く描けてはいるが、芸術というものの持つ「何か」への、追求がもう少し欲しかった。

「夏衣更紗」 ある母子の危急に手を貸した主人公。相手の母子の家に住み込むことになる。吸汁性の昆虫アザミウマは良く描かれている。主人公はその家族と結び合う決意をする。もう一歩踏み込むと、なかなかの小説になったのではと惜しまれる。

「神棚毀し」 神棚を壊し、村八分を経験した家族の話、史実としては興味を惹かれたが、小説として何を訴えたかったのか。

「幽霊」 体の弱い中年男性が、高校二年生と関わり、対

話をしていく話。中々教養的な事柄も出てくるが、一つひとつの内容について作者なりの核心をつく言葉で読みたいと思った。

「蛇を飼う」 ルームメイトの話、『道成寺』が下敷きらしいが、女同士の関係の何を描こうとしたのか。

「トゥーランドット 誰も寝てはならぬ」 有名だった詩

人との関係が興味深く描かれてはいる。ただ、小説より評伝にした方が良くかもしれない。



入選

「茜色のカノン」	宮 幸作	「芝居」	白峰 綾
「誓い」	森園哲也	「タカヤスの墓参り」	小林 健
「夏の日」	K・暁夏	「まぼろしの声」	星野秀水
「奇老譚―月は見ていた」	しのぶ憂一	「はつこい」	鈴木あぐり
「軋む歯車」	飛葉哲朗	「虫」	待木 啓
「黄身子と水仙」	安保養智子	「『なんでもあり』やった」	土井莊平
「秋月の朝露」	笠置英昭	「おとうと」	はるひ
「ムカデ記念日」	木澤 千	「ニット帽と詩人」	神郷愛光
「見えない壁」	春名紀子	「父の髪」	河野つとむ
「脱獄犯と蛙」	横山太一	「冬の夢の終わり」	武藤蓑子
「花梨の花」	梨田智光		

力作ぞろい

小浜清志



今年も力作ぞろいであった。かつて自分史や遺書まがいの作品もあったが、近年は文学的に質が高くなってきた。今回当選になった「出所証明」(原浩一郎)は非の打ち所のない作品である。刑務所を出た男が出

所証明を役所に提出することで健康保険証を受け取り、就職のときの身分証明とするはずだった。という書き出しに度肝を抜かれたが、塀の内側を歩いてきた人間模様には圧倒的な物語の強さを感じた。何年か前にも当選作を書いており、筆力も題材選びも秀逸である。これだけの作品を書ける人が無名でいることが不思議でならない。

優秀賞になった「マスク」(眞住居明代)はまさに今書かなくてはならない作品で時機を得ている。コロナ禍でマスクが不足になっていく世情をうまく取り入れる着眼点はユーモアもペーソスもあり読み手を惹きつける。

「ラストオーダー」(塩崎憲治)は、企業戦士として生き抜いてきた男が定年後に脾臓がんのステージ四と宣告され

るところから幕が上がり、来し方を懐かしく時には憤りを覚えながら振り返る。その視線に作者の人間味があふれていて作品の奥行きを豊かにしている。趣味である溪流釣りで幻の大岩魚との格闘も仕事人らしい姿勢が現れていて読後感も良かった。

「トランクルーム」(室町眞)は、奇抜な発想に作者の慧眼を感じた。賃貸式トランクルームは賃料に比べれば意外と広い空間を自由に使用できることに思い当たった誠司は意を決して不動産屋に向かう。しかし、どこにも空きはなくキャンセルが出るのは一、二年もかかると言われ夢はしぼんだかに思われたが二週間後に空きが出たとの電話が入り誠司の僥倖が始まる。牢獄然となっていた自宅の他に身を隠せる空間がもてたのである。定年男の悲哀が滲み出ている。

奨励賞の「家族の肖像」(折口真)は、子づれの再婚同士の家庭にまつわる話をうまく描いている。私は高得点で押したがあまり賛同が得られなかった。無理に築こうとする新しい家庭にきしみがあるのは当然である。敢えて小説にしようとする小細工はなく、ありのままの姿を冷静に捉えようとする姿勢がリアルであった。かなり難しい題材と格闘している痕跡が至るところに現れていて脱帽する思いで読み終えたことを告白する。

「棄民の浜」(久保信之)は、恭子と付き合いだしてまだ

三カ月。お盆休みを利用しての初めてのキャンプをするこ
とになり、房総の海岸を訪れる。郷土史を巧みに使い、訪れた場所の怪奇現象へと入っていく様には思わず鳥肌が立った。しかし男と女がキャンプといえども夜を共有するわけであるから同衾は避けられないことであるが、作者はあえてそれに触れようとはしない。であるなら、道に迷ったあぐくテントを張ることになったとかもう一工夫が欲しかった。

「バデイスの記憶」(木村雅樹)。バデイスとは東京下町の小さな雑貨屋でいつも小田が買っていた薔薇の造花につけられた名前だった。小田の子にまつわる真相が次つぎと明るみになっていくスリリングもさることながら、うまい書き手である。登場人物の扱いもうまく、魅力ある人たちを見る目も温かい。ただ、小田の死の扱いに不満が残った。

「雨が上がる前」(吉岡幸一)。わずか九坪、この春貯金を切りくずしてオープンしたばかりのセレクトショップ「サン」の女主人として働く私は本来ならば夫と一緒に店を切り盛りするはずであった。だが、その夫は店のオープン四カ月前に心臓の病で世を去る。「私」は夫の意志を継ぐ格好で毎日店を開けている。店の向かいにある洋食屋との付き合い合い、店に訪れる客との交流など爽やかに描かれていて好感がもてた。ただ、男性が女心を表現するのはかなり難しいのであり、それが評価の低さになったのであろう。

それ以外に何作か気になった作品を取り上げたい。

「牡丹雪」(前岡光明) 売れない画家を父に持つサチコが二年ぶりに故郷を訪れる。父も母も今はなく思い出の写真館と向き合う。金を借りるため隣の親戚を訪ねた帰り、山本写真館に父が入る。長い時間待たされたが金を手にして父が戻る。その翌日幸子は給食代二カ月分を払った苦しい出がよみがえる。明日は七年前に亡くなった母の命日、明後日は六年前に亡くなった父の命日。サチコは暗い過去を乗り越えて自分をつかむ。

「よじわの茂蔵」(西山慶尚) 素朴な人々たちを優しく描いている。もう少し構成を練っていればもっと評価は上がったろう。力のある書き手であるから再度挑戦してほしい。「行き合いの空」(秋檀) 書きなれた作者である。教師になるために大学院まで進むが、友人から頼まれて小料理屋のバイトをしたことで料理人の面白さにはまってしまう。料理の奥の深さを見せようとしているがまだ伝わっては来ない。

毎年力作を前にして文学の裾野の広さに感動している。



多彩な題材と手応え

五十嵐 勉



再開二回目の銀華文学賞は、老年の題材に偏ることなく多彩な題材に富み、豊かだった。経験の広がる世代の小説にふさわしく、多様な人生模様や社会の切り取り方が呈示されていて、読み応えがあった。前回の選評で、老いの現実や問題を取り上げるだけでなく、若い時に経験した世界にまで敷衍して、深い思索を重ねて構築してほしいと言った希望によく応えてくれた観があった。

なかでも、一つ突出していて、三人の選考委員が最高点を付けた作品があった。原浩一郎氏の「出所証明」で、題材の特異さと、描き方の的確さ、勁さは、群れを抜いていた。刑務所から出る時の証明書を失ってしまうことを軸に展開するストーリーは、普通の社会との違和を浮かび上がらせるだけでなく、前科を負う者の過去の世界と、引き摺る鎖の重さを露わにする。出所証明を持って真面目な職に就こうとする主人公に、昔の仲間が言う。「お前、さんざ

ん悪さしてきて、明日から真面目になりますやて、なめさらすな。ガキが」「お前のせいで首吊ったやつおるやろ。何人女をソープに沈めたんや。お前がはめた奴ぎようさんおるやろ。ええ?」「どの面下げて、真面目になりますや。お前のこと許すと思うか」これらの言葉には、強烈なりアリテイがあり、一般社会と刑務所の深い谷間が覗いている。出所証明の紛失が、同時に出所した仲間のいたずらから生じることや、証明書の再発行を署長が鼻で笑って取り合わないことなど、一つ一つに現実感があり、それらがみなこの小説の緊迫感を構築している。花火のシーンや音、群衆の動きに、社会の波が背景をなし、その中に過去の自分の酷い行為を思い出すなど、名場面を見えるような鮮やかさがある。これらは原氏が長年刑務所に近い位置にいた蓄積の上に構築され得た世界であり、結晶にちがいない。それはまた広く人間が自分の罪を振り返るとき、同じように経験する贖罪の道を暗示しているものでもあるだろう。拍手をもって、受賞を祝いたい。

優秀賞はバラエティに富んでいた。現代的な素材が眼を引いたせいもある。室町眞氏の「トランクルーム」は、小さな貸空間に、自分の日常の逃避スペースを得る話である。実際には居住や安息を許さない営業も多いが、可能性としてはあるし、現実には個人用の小さなレンタルオフィスが今都心で流行しつつある。むしろそれを通して浮かび

上がる、現代人の心理構造が浮き彫りになるそのことのほうが本質を突いている。室町眞氏はそれを抽出して、現代の日常に潜む歪んだ心理のあり方を剔出した。それは銀華文学賞ですでに何度も優秀賞を受賞している氏らしい鮮やかさを示している。確かに人には知られたくなく、踏み込まれたくない個人の領域があり、それが密かな自己の原動力の核になる。それを喪失している現代人の裏面の相貌と危機が奇妙に浮かび上がってくる。個人空間を求める主人公の行動が、実は社会全体の動きとなって見えてくるところに、この小説のおもしろさがあり、また真の社会の危機が予感される。これは電子社会の、プライバシーを喪失しつつある現代の危機の本質をも裏側から照射している。

同じく優秀賞、塩崎憲治氏の「ラストオーダー」は、オーソドックスな筆致で目新しさはないが、膀胱癌という現実を前にしてその人生を総体的に振り返りつつ、生きる意味に迫る勁さは、ひたむきなものを感じた。すべてを盛り込もうとして、あれもこれもと過多になっているのではないかと、それによって問いつめが見えなくなっているのではないかという批判もあったが、その切実な文章の迫り方に、切実さがあり、それは訴える力になっていると思った。サラーマンの競争社会を「争うように蛭が這い上がっていくヘド口の中に、ずぶずぶと腕を沈め、二十ドル札を手探りするような毎日が続いた。」などの描写に真実味がある。

人生の意味を自己の時間の流れの総体に求めるとき、これくらいの鋭さがあって当然だし、差し迫ったものであることは自然だろう。それは書けていると思った。

眞住居明代氏の「マスク」はあまりにタイムリーで、この時期このように早くコロナを題材にした作品が出てくるとは思わなかった。注目度は当然大きく、始めの採点集計では二位に躍り出てきたが、時機になっっている点は大いに買うものの、文学としての掘り下げにどこまで応えているか、という点が議論の争点になった。著者自身に連絡して、若干書き改めを加えてもらおうということで、着地を得た。優秀賞としては幾分補う必要はあったものの、この悪疫の流行をこும்早く題材として生かす手腕には注目すべきものが確かにある。そしてこのテーマは、いくらでも広がる、様々な問題を突き付けてくる可能性がある。いろいろな角度、いろいろな視点からアプローチが可能であろう。今や全世界を脅かす、この大きな問題は、作家が取り組むべき一つの領域を広げている。問題の本質をよく見極めながら、さらにこの題材に踏み込み、格闘していつてほしい。

人間を脅かす生命を扱っている点では、奨励賞の嶋津治夫氏の「稲作拾遺譚」も、共通点がある。この作品は稲の侵入害虫ジャンボタニシの増殖とその被害を追いながら、昔からの害虫の歴史の流れを込め、稲作への営為によって

生き永らえてきた人間の立場を、自然の中から振り返っている。このユニークな視点は、農業行政に現場から長く関わってきた筆者ならではのもので、大いなる営為と大地の壮大な歴史が感じられるところは、希有な価値がある。これは小説ではないという主張する論者もあるかもしれないが、新型コロナウイルスという新たな驚異が蔓延するこの現代においては、逆にこういう視点こそが重要で、ここから新たな小説領域が広がっていく可能性は大いにある。優秀賞でもよかったが、今回は奨励賞に甘んじてもらった。この立場から、コロナウイルスのような驚異をどう捉えるか、氏にも挑んでほしい気持ちもある。

「バデイスの記憶」は惜しい奨励賞作品で、読み手をぐいぐい引っ張っていく木村雅樹氏の筆力はかなりなものがある。文章の流れはよく、匂いもある。しかし最後の結び方が碎けている。再就職のうまくいかなかった中心人物が、再就職できた直後に死ぬという事件が、自殺なのか、たんなる交通事故なのか、揺れ動くところにこのストーリーの牽引力があるにもかかわらず、結局事故だったというのは、人生の意味を汲み取る作業としての文学にはなっていない。前に辞めた会社の使い込みの濡れ衣は人間としては晴らせても、命に意味を見い出そうとする文学の問いかけには答えていない。「あつけない死」で終わっているのは惜しまれる。

なによりもこの作品には人間を包み見る温かさがある。ぬくもりが残る点が、美点だった。

温かさという点では吉岡幸一氏の「雨があがる前」も共通したものが感じられたが、全体にやや甘さがあり、雰囲気や情緒に流れている点が気になった。真向かいの店が火事になって、もっと主人公の側にもいろいろ影響が出てくるはずだが、他人事として何もなく流れていくのが不自然に映る。他の選考員が推したのに飲まれたが、もっと推敲を重ねれば魅力が前面に出たはずで、惜しまれる。

佳作にも印象に残る作品がいくつもあった。

「託された日記」(松本昂幸)は、大学時代のテニスの同好会で得た親友の、一流商社に就職しながら、挫折して自殺する事件をストーリーの軸にしている。彼が同性愛者であり、エイズに罹ったことも露わになりつつ、不可解の扉が開けられて、流れとしては盛り上がりつついく。この筆力は力量を認めるが、肝心の託された彼の日記は最後まで開かれることがない。この小説はその日記の内容が主体になるはずで、それを加えるには五十枚では無理がある。倍の長さにしてはじめて形を得るものなので、あらためて書き直すべきだろう。

「碁盤」(加崎希和)は、小唄の師匠であった父親の碁好きを、価値ある碁盤を通して追懐している作品で、戦前の花柳界の風景もよく浮かび上がって、愛人を持つ華やかな

「棄民の浜」は、一種の呪縛空間を現出させている。ある海岸の昔の「姥捨山」だった地帯に、まだ異空間の怨念生命が生きていて、主人公たちはその空間に入り込み、取り込まれそうになりながらもかううじて脱出する粗筋だが、現代でも確かに恨みや怨念が蓄積している空間は存在するだろうと想わせる作品になっている。なによりも恐怖をかき立ててくるものがここにはある。現代のバーチャル仮想空間の横溢で、見えにくくはなっている。久保信之氏は、この地球上には無数にありそうである。恐怖によってそうした空間を現す力量を持っている。

篠崎フクシ氏の「熱帯林」は、サラリーマンの苦悶の狂気を熱帯林の熱さに喩えて、書き切っている。組織のなかでノルマを強いられて動く苛酷な営業活動が、熱く苦しい息を吐き出させ、灼熱感を掻き立てて、生きることの喘ぎを伝えてくる。体験に基づいているようにも感じさせるリアリティが、この作品にはある。短絡的な側面もなくはないが、ある喘ぎが伝わってくる点で評価した。

子連れの再婚見合いから新家族が生まれるが、馴染まない子供のギクシャクした形のまま別居家族が推移していく姿を見つめて、あらためて家族の意味を問いかけた作品も、意外に支持された。織戸正義氏の「家族の肖像」は、題材は地味でありふれているものの、別居家族のあり方の現代風な形については、少し変わった視点を備えていた。

生活も色彩豊かに描かれている。その時代、その世界が生きてきと動いていることは、筆者の筆の鍛錬があるからで、文学の一つの良質な役割が、ここに体现されている。父親の道楽の象徴として残された値打ちものの碁盤が、いつまでもそこに重みを持って存在するような、心に残る佳品である。

「幽霊」(本田敬幸)は雪の日に友人を待つ状況の下で、たまたま途中で車に乗せた高校生と待ち合わせの喫茶店で話をするストーリーだが、奇妙なりアリティがあって、ひどく生き生きとした文章が胸に残る。結局待っていた友人は現れず、幽霊のような人影を見る。応募の直前に亡くなっている著者の遺作で、それ自身がその存在である不思議な符合性を覚えた。

「蒼い残滓」(勢隆二)は関西の工場の現場を活写していて、活気に溢れた労働の世界が押し寄せてくる。よく書かれていて、労働者の息づきが伝わってくるのだが、そこで生まれた軋轢の意趣返しを、部内対抗野球で実現する、という組み立てに難がある。デッドボールくらいで晴らせる恨みや矛盾なかと、カタルシスに欠けることが惜しまれる。

今回歴史小説も何作があり、どれもかなりのレベルに達していたものの、佳作に留まった。「室津の遊女友君」(宮本義則)は木曾義仲の愛妾山吹が西国へ落ち延びて遊女と

して生きていく姿を描いていて、焦点の当て方はよく、読ませる力があつたが、主人公の生きる力まで蘇らせることができない点に、迫力不足があつた。

「蛇を飼う」(高倉麻耶)は同じ高校から絵を学ぶ二人の親友同士が、同居して、より親しくなり、一方が絵を描くために蛇を飼う。「安珍と清姫」をモデルにした絵だが、一方に恋人ができて同居を離れると、残された方が自殺を遂げる。あとに「安珍と清姫」の絵が完成されている、というストーリーだが、筋の奇抜さはインパクトがあり、独特な発想を感じさせる。ただ、蛇についての描写がもっと欲しかったのと、「安珍と清姫」という古典に安易に寄りかかるところが、安手を感じさせる。「安珍と清姫」を出さないほうが興行きは増しただろう。

「坂の上のインディアン」(吉田満春)は、幕末から明治初頭に英語通訳官として活躍した森山栄一郎の一代記で、埋もれた存在に光を当てた功績は買うものの、全体が地味すぎて、埋没してしまった。坂の上にいたというインディアンの話も、記憶の中でとぼれてしまつて、全体に生きてこない。もっと時代の曲がり角における劇的な通訳シーンを盛り上げて書けば、主人公も生きただろう。縁の下での活躍者は、表舞台を華やかに動かすことでより光輝くと思われる。

今回は総じて、バラエティに富み、発想も着想も豊かで、

い。次の就職先に行くには「出所証明」で保険証をもらう必要があるが、一緒に出所した男に、妬みから盗まれてしまう。話は色々あつてハッピーエンドで終わるのだが、少し甘いのではないかと思つたが、別の選考委員の指摘があり、もう一度読み返すと、主人公にも今までの罪の意識があり、未来はそんなにバラ色ではない事が分かる。前作も驚かされたが、中々優れている。

優秀作眞住居明代氏の「マスク」はコロナ騒ぎが起きてから作品化されたものと思われ、スピードが速い。こういうものは先に作品化した方が勝ちである。それだけでも賞の価値はある。最初は人助けのためにマスクを作り始めるが、商売となり、最後は狂気に近いところまで追いつめられる。面白い作品である。

優秀作室町眞氏の「トランクルーム」は、常連の彼らしい発想である。トランクルームを借りることで自分だけの世界を持つが、別のトランクルームにも別の人間が住み、生活があることが分かる。そして、逃げてきたはずの家族に最後は見つかつてしまう。書きたいことは伝わってくる。

優秀作塩崎憲治氏の「ラストオーダー」については僕に取っては評価が難しい。臍臓がんであることが分かった男が妻とホテルに泊まり、釣りをする。それに仕事のことやいじめられた上司の話があり、少し散漫な感じがある。ただ、川の王の話や、やや希望が残る結末は良いと思う。

体験の層の厚みも感じたが、もし銀華文学賞と今年から始まった新人賞を、それぞれ白組、赤組として競った場合、雲開きの白組が負けていたように感じる。「出所証明」が存在したことで、かろうじて白組が逆転勝利を得たものの、劣勢は否めない。今回は深い経験、広い見聞を備えた、若い世代に負けない発奮した作品を期待したい。

力作が集まった

大高雅博

久しぶりの銀華文学賞だったが、かなりの力作が集まった。特にオカルト系の作品が複数あり、これは初めての事だろう。コロナの姿が見えない不気味さが反映されているのかもしれない。

当選作原浩一郎氏の「出所証明」は、他の選考員は高く評価した。僕も高評価には違いないが、ちよつと引つかかる部分があつた。刑務所内で次の仕事先が見つけれられるのかとの疑問があつたが、喜ばしいことだがそれが可能らしい。



奨励賞吉岡浩一氏の「雨あがる前に」は、文章が良い。セレクトショップの話で、少し甘いかもしれないが、良い話だと考える。

奨励賞久保信之氏の「棄民の浜」は銀華文学賞では、珍しい、オカルト、伝奇系の作品である。鳥居内の浜から、出られなくなるといふ内容で、そこからの逃げ方も、評価できる。伝奇物としては優れている。ただ、恋人の描き方がやや平凡か。

奨励賞篠崎フクシ氏「熱帯林」は、過労で追い詰められる人々を描き、迫力はある。ジャニス・ジョップリンの曲を効果的に使っている。

今回は力作がそろっている。上位に行けなかったが、詩人の谷川雁についての作品があり、興味深かった。谷川雁を知らない人が多く、その辺を書き込む必要があつた。また、浅草の昔に戻る話があつたが、戻った浅草をもっと詳細に描き込めば良かったと思う。(ジャック・フィニイの「振り出しに戻る」を参考にして欲しい。)

今回も選考委員会ではかなり激しい議論もあつた。銀華文学賞はしばらく間が開いたがそれだけレベルの高い作品が集まったということだろう。今後も期待したい。

第14回 銀華文学賞 作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。

今年も、どうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。

●●募集要項

募集内容 ●オリジナルの短編小説作品。これまで同人雑誌などに発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

応募資格 ●2021年4月30日時点において40歳以上の者

応募規定●

2万字以内（400字詰原稿用紙50枚以内）（短いものでも可／原稿用紙使用の場合は必ずA4の大きさの原稿用紙を使用のこと）。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取って応募（コピーを応募するのが望ましい）。

別紙に①応募部門（第14回銀華文学賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム／それぞれふりがなをふること④年齢・生年月日・性別（これらのないものは失格とする）⑤〒（必ず記入）・住所⑥電話番号⑦職業・略歴

応募者には結果を通知する。

応募審査料 ●2800円分の郵便為替（郵便局で購入／無記入のこと）で同封。外国からは26USドル。

応募先 ●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

文芸思潮「銀華文学賞」係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞 ●銀華文学賞 ■賞状・トロフィー・賞金20万円（受賞者2名の場合は10万円、3名の場合は7万円）

河林満賞 ■賞状・トロフィー・賞金5万円

優秀賞 ■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上の場合は2万円）

奨励賞 ■賞状・賞メダル 佳作・入選 ■賞状

選考委員 ●作家集団「塊」メンバー

締切 ●2021年4月30日（当日消印有効）

発表 ●予選通過者は2021年9月25日発売の「文芸思潮」81号に発表する。受賞作・優秀作は2021年12月25日発売の「文芸思潮」82号に発表掲載。奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催 ●文芸思潮

※主催者から 真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、斬新で強靱な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。



選考会風景 2020.10.18 「サロン・ド・八覚」邸にて

銀華文学賞選考委員プロフィール

大高雅博

おおたか まさひろ

1954 石川県生まれ 日大国文学科卒

80「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞

他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥ・リメンバー」など

小浜清志

こはま きよし

1950 沖縄県生まれ

劇団四季など様々な職を遍歴

87 作家中上健次に師事、マネージャーを務める

88「風の河」で文学界新人賞を受賞

八覚正大

はっかく まさひろ

1952 東京生まれ

早大理工学部数学科・都立大仏文科卒

91「十二階」で新潮新人賞受賞 文芸学校・NHK学園講師 主著『「シュルター」発』（けやき出版）『夜光の時計』（新読書社）詩集『朝一の獲物』『学校のオゾン』（共に洪水企画）

五十嵐勉

いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ 早大文芸科卒

79「流瀆の島」で群像新人長編小説賞受賞 84-90タイ在住、カンボジア問題取材「東南アジア通信」「ASIA WAVE」編集長 主著『緑の手紙』（インターネット文芸新人賞）・『鉄の光』『ノンチャン、NONGCHAN／聖丘寺院へ』『破壊者たち』

作家集団「塊」新メンバー募集中

連絡 090-8171-9771